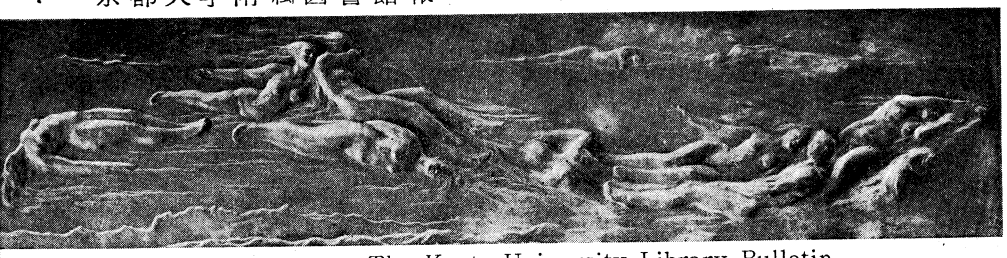
京都大学附属図書館報



静脩

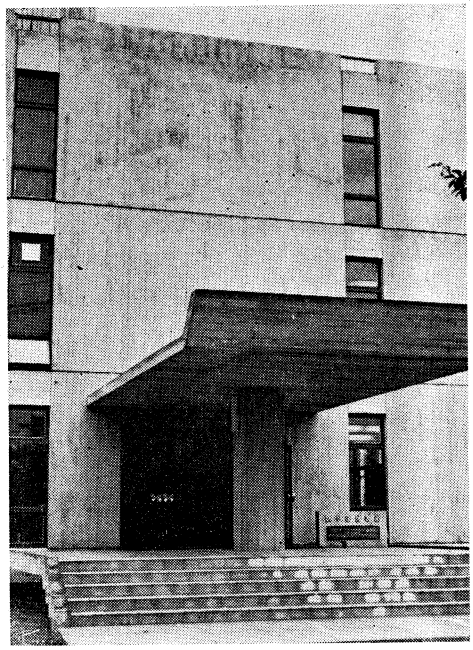
1965年 7月

Vol. 2, No. 2

The Kyoto University Library Bulletin

医学部図書館の竣工を祝う

堀　江　保　蔵



医学部図書館正面

待望の医学部図書館が竣工し，ここにその式を挙げられますことは，まことに欣快に堪えないところであります。

申すまでもなく，図書館は大学における研究および教育を推進する上の中心機関でありまして，その設備・機能が整備・充実しているかどうかは，研究および教育の進歩に至大の関係があります。京都大学付属図書館におきましては，昨年末に図書館改善特別委員会を設け，部局図書室を含めて全京大図書館の近代化の方途を検討致しております。未だ結論に到達してはおりませんが京大のような大きな総合大学の図書館について描かれるあるべき姿の一つは専門分野に応じていくつかの研究図書館(research library)があり，中央図書館は学習図書館 (undergraduate library) の機能を発揮すると同時に，研究図書館の機能を総括するような役目を果たすことであります。このようなヴィジョンから見まして，このたびこの図書館が竣工し，医学部・病院・結核研究所，およびウィールス研究所の図書室を糾合して，医学に関する専門図書館として新たに発足されることになりましたことは，京大図書館が進むべき途を具体的に示されたものでありまして，喜びに堪えないと同時に，非常な心強さを覚える次第であります。

わが国全体を眺めても，広く世界的に見ましても，研究図書館の制度が最も発達し，したがって図書館相互の協力関係が最も緊密に結ばれているのは，医学の分野においてであります。この図書館の建設は，このような背景があってのことだとは存ぜられますが，それにしても，これまで部局ごと教室ごとに分散していた図書館機能を統合・拡充することに踏み切られた医学部長はじめ教官各位のご理解とご勇断とに深い敬意を捧げなければなりません。同時に，この図書館が蔵書構成・設備・職員組織を整備充実し，医学に関する専門図書館として，京大医学の高い水準にふさわしい機能を発揮されますことを，深くご期待申上げる次第であります。

以上をもってお祝いのことばと致します。（付属図書館長）

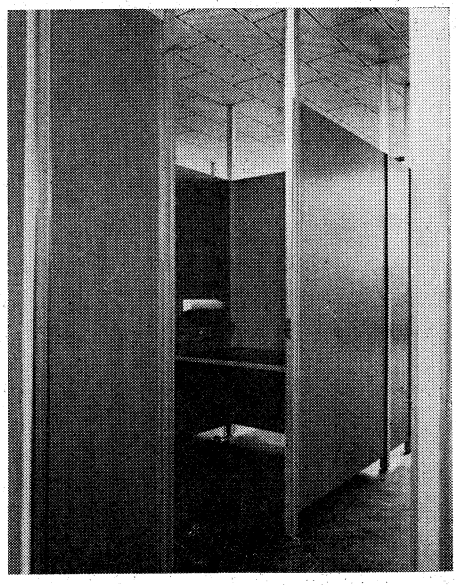
新しい図書館のプロフイル

新鮮な息吹と躍動

近年，学内部局研究室にいくつかの新しい図書室ができた。そのうち今年になって開館された経済研究所資料室，数理解析研究所図書室および，最近竣工した医学部図書館をとりあげ，それぞれの横顔をのぞいてみることにした。

医学部図書館

長年の宿願であった医学部図書館，それは遂に完成された。総工費約1億円の容姿は，そのうぶ声をあげるにあたり，総長，附属図書館長をはじめ多数の学内関係者が参加された6月12日の竣工式によって飾られた。新しい医学部図書館のこうした誕生は，館の名板にもあるように，藤原記念財団および China Medical Board of New York, Rockefeller Foundation のご好意により資金の援助を得るとともに，さらに国費の交付を受けるなど各位のご協力があったからにほかならない。目下，開館への諸準備が急ぎ進められているが，そのなかで医学部とともに関係部局の職員，学生の総合的利用が打出され，かつ全館の自由接架式を採用して利用者の全面的利用が考慮されようとしているのは，その大きな特徴点であるといえる。



個人閲覧室

簡単にスケッチをしてみよう。

位置　解剖学教室の南側，近衛通に面し，東西に長く，西に入口を設置

建築　鉄筋コンクリート3階建,一部分が地階で冷暖房の機械室，書庫は4層，総延坪481坪（2,247.3平方米）である。

受付　まず身分証明書を提出する，かわりに番号札を渡す，以後は自由に館内が利用できるようになる。

閲覧室　1階の第1閲覧室は雑誌閲覧室とも呼ばれる。新着雑誌約800種（和洋）が排列され，窓下書架には索引，抄録雑誌がならぶ。2階の第2閲覧室は図書閲覧室とし，3階には学生の自由閲覧室を設置。

喫煙室　1階と3階にある。この部屋は新聞架がおかれ，ときに音楽が流れる。

研究室　第1，第2研究室はアコーディオン・ドアーで区切られ，別個にもまた合併しても利用できる。ただし医学研究に関係する場合に限る。

個人閲覧室　一定期間にわたる研究，論文の作成などに使用される専用閲覧室。

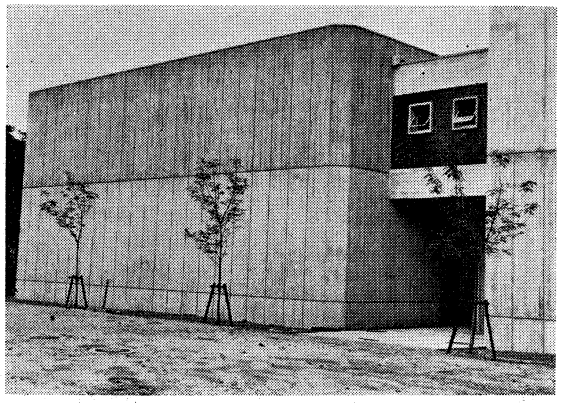
文献複写室　ゼロックス，エレフアックス，およびＡＢディックなどの印刷機を置き，その範囲での文献複写や，コンテンツサービスを行なう予定。

電話機など　学外電話のほかに書庫の各層には館内電話があり，書庫内での疑問をただちに係員に連絡でき，また病院内だけの電話をも併設しているので結局三種類の質問と回答が同時に行なえることになる。

放送設備も完備しているので機械による意思伝達はこれで十分ではないだろうか。

以上はその概要であるが，角度を変えて見るとなお今後の問題は多い。定員不補充の問題がからむなかで，館員の構成は利用者の便，不便に影響するであろうし，夜間開館あるいは1～3階の閲覧室と1，2階の事務室における人員分割化，館内における参考・整理事務体制などの問題解決は急務である。この点図書館経費予算化問題と合せて各方面のご協力をお願いしなければならないだろう。

経済研究所資料室



経研書庫

京都大学附属図書館の西にモダンでこじんまりとした建物がたちました。これが京都大学経済研究所です。総工費約1億円，建物は本館地下1階，地上3階（将来4階を増築予定），書庫地上1階3層，延面積2536m^2（767坪）です。

資料室および書庫　本来ならば図書室と名付けるところを資料室といっているのは，研究目的の性格上，図書を含めて，逐次刊行物，インフオメーション資料，マイクロフィルム等あらゆる資料を総合的に収集整理するからである。

さて当研究所の特徴の一つとして書庫があげられる。収容可能蔵書冊数15万冊，無窓で，内には除湿機12台，排気フアン1台，自動火災報知機が備えられ，資料の保全がなされている。一研究所の書庫としては少し贅沢に思われるかもしれないが，数十年の蔵書冊数を考えれば決してそうではなく，書庫を第二義的に考えがちな昨今の風潮を打破した関係者の努力に敬意を表したい。

資料の収集と利用　研究目的に一応の限定があるから収集方針もそれにもとづいて計画される。間口の狭い奥ゆきの深い特異なコレクションがなされる。

利用についての本格的規定は立案中で，現在は暫定的な規定で利用されている。本規定にはできる限り多くの人々が利用できるようにする計画である。

将来の展望　また，特異なコレクションを基礎として将来は産業経済文献センターの設置が予定されており，そのあかつきにはさらに広く開放して研究者に利用されるようになり，レフアレンス，インフオメーション，ドキユメンテーションサービス等積極的な図書館活動が計画されている。

数理解析研究所図書室

当研究所は数学から科学工学の基礎分野にわたる広領域な研究を純粋，応用の区別なく総合的な研究を行なう全国大学の共同利用研究所として，昭和38年4月京大に付置されたものである。昭和39年5月に第一期工事，本年3月に，第二期工事が完成し，3階に書庫ができた。現在はその書庫を応急処置として三つに区切り，閲覧室，図書室，書庫に使用している。閲覧室，司書室は，第三期工事でできることになっている。

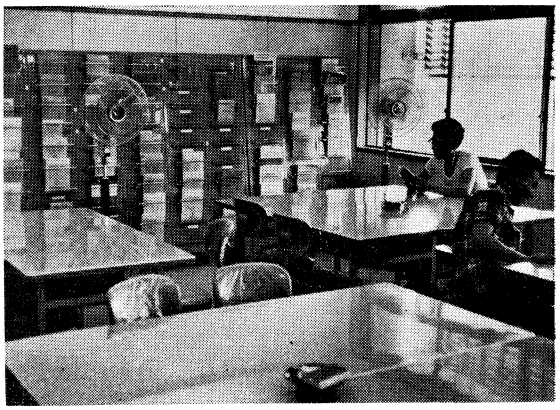
6月1日現在の蔵書数は，単行本5,120冊（うち和書432冊），雑誌203種類（うち寄贈雑誌60種類）である。まだ図書を購入しはじめてから2年余りなので，蔵書数はきわめて少ないが，年間増加冊数は多い。今後もおよそ年間3千冊購入していく予定である。当研究所には，実験講座がないため，今後，ますます図書の比重は大きくなるであろう。

図書室には現在6名の職員が働いているが，購入図書が多いことや，カードをすべて図

書室でつくっているのでなかなかどうして忙しい。

閲覧資格は，大学院の学生以上の研究者で，共同利用研究所であるから，当研究所以外の人も利用を歓迎する。しかし目下のところ，所外からの利用者は少ない。

図書室は，まだ生まれたばかりのヨチヨチ歩きである。利用者のためのサービスも軌道にのっていない。問題もいろいろある。書庫は，いわゆる書庫としての建て方ではない，こういう時，図書の保管をあづかる者として，ほこり，湿気などからどうして図書を守っていくかという問題がある。この書庫のスペースで，毎年3千冊購入していけば，今に，図書をおく場所に悩むのではないだろうかと心配にもなる。図書室が3階にあることも，いろいろの点で苦労する。現場職員の意見もいれてもらえたらというのが，ささやかな願いである。



数研閲覧室

座　談　会

新しい図書館をみて

（6月30日於医学部図書館）

静脩委員会では，最近新しくできた医学部図書館の竣工に際して，数理解析研究所図書室，経済研究所資料室をも含めて，その見学を行ない，医学部図書館において，2名の医学部学生をまじえて，「京大図書館に対する希望を述べる会」とでもいうべき座談会を催した。以下，このときの発言を要約してお伝えしよう。

新しい図書室について

A：一般的に見て，学内の各図書室は従来から，建物の片隅か，屋上に近いような所に追いやられた傾向にあり，これでは，図書館の効果的，かつ能率的な運営という点からは，不便な所が多かった。

B：このような問題は，大学の中で図書館の占める位置を，みんながどう認識しているか，ということにつながっている。

C：それには，図書館側のＰＲ不足もあるのではないか，やはり図書館というからには，利用者第一に考える必要がある。

D：たとえば，経研資料室では利用者がすべて研究者に限られているから，研究室と資料室とを同じ階に設けてその点を考慮されている。

E：医学部図書館では，事務室と書庫の間に閲覧室があるが，これは円滑な出納事務を行なう上でさまたげられないだろうか。

F：勿論そのことも考えたけれども，閲覧室の収容力を増すために，やむを得ずこういう設計になった。これについては，閲覧室内に可能な限りの新刊書架をおくことによってカバーしていくつもりだ。

E：研究者本位の立場からいうと，書庫内にキャレル（庫内閲覧机）をおくのが良いと思うが。

F：この問題については，庫内にメモ台つきの椅子を備えることを考えているし，又医学部図書館には，3階に個人閲覧室も設けてある。

G：いずれにしても，このように建ってしまった後で色々注文をつけるよりも，将来はでき上る前に図書館員の意見も充分述べられる場を作って欲しいと思う。

A：経済研究所の書庫は，さすがに書物が研究の中心になる研究所らしく，防湿換気等，資料の保存に相当意を用いておら

れる。できたらこれから建つ書庫も，百年の先を見通して，スペースと保存体制を考えて欲しいものだ。

B：自然科学系の部局では，実験が中心であり，重要な資料は図書よりも，むしろ雑誌である。これらとて，早晩役に立たなくなり廃棄される運命にある。人文，社会科学系では，どんな資料でも貴重であり，保存される必要がある。こんなところに神経の使い方も変化する原因があるのではないか。

E：現在図書館関係者は，蔵書の激増と，その保存方法に悩んでいる。図書は，ふえることはあっても，決してへりはしない。この問題について，今日見学した三つの図書館は，新しくできたものだけに，どのような見通しを持っておられるのか，お尋ねしたいところだ。

F：しかし，こんな大きな根本問題は，各学部等で，現在の時点でいかに考えたって解決策は出ないだろう。それよりも，大学の中に，不急不要となった図書を専門に集める書庫を建てるという方向で考えなければ仕方がないと思う。

新しい学部図書館と学生について

A：学部等の図書室は，従来からややもすると利用対象として教官，研究者を第一とし，学生を第二義的に扱って来た。丁度，ここには医学部学生のYさん，Zさんも来ておられるから，新しい医学部図書館の建設を契機に，学生をどう扱う方針なのか，お尋ねしたい。

Y：図書館の運営委員会に大学院生や，学生の代表を参加させるということは考えておられるだろうか，学生の見たい本と，教官の見たい本には差があることだし…

F：学生の参加は認められていない。それにまだできたばかりで，規則自体検討中というところだ。

Z：個人的な意見に過ぎないが，学生の図書委員会を作って，そこで討議された意見や希望を反映してもらえるようにはできないだろうか。これまで，図書の購入には，学生は全く関係がなかった。医学部の場合，私自身も，古い図書室をのぞいて見たこともない。研究室単位の図書室ではなく，学部単位の図書館となれば，学生のことも考えて欲しいと思う。

F：学生閲覧室を設けてあるし，学生の利用を考えているからには，その希望はできる範囲で満たされるようにしたい。

Z：医学部卒業生で組織されている芝蘭会の図書部には現在3,000冊余りの蔵書がある。これも，こんな立派な図書館が建てば，見に来る人がなくなってしまうだろうから，この蔵書を図書館へ移すことは出来ないだろうか。

A：芝蘭会寄贈ということにでもして，それに芝蘭会文庫という名称を与えれば技術的に可能だと思うが。

B：医学部図書館の如く，研究機関，教官，学生等多様な利用者を持つ図書館では，収書についてのプリンシプルも，相当考える必要があろう。

Z：何しろ医学関係では，教科書でも非常に高価で，貧乏な学生には買うことも出来ない。医学部に限らず，この教科書購入の問題は，大学としても何か対策をたてて欲しいものだ。

B：いずれにしても，今までのように学部図書室が，学生に対しては全く二のつぎにしか考慮をはらっていないということは，是正されることが望ましいことは確かだ。そのためには，学生側からも積極的に働きかけることが必要だし，図書館も，あるべき理想像についてＰＲし，発言力を養わなければならない。

Y：医学部では夜間開館は考えておられるのか。

H：人員不足や館員に男が2名しか居ない現状では夜おそくまで仕事をするのは不可能だ。

Z：それでは，医学部の学生にとっては，授業の時間中開かれていて，さて利用できる時間になると閉館されてしまうということになる。

F：勿論人員の問題その他が解決して，夜間も開けるようわれわれも努力する。

A：夢のような話や，現実の問題などが飛び出して，まとまりのない座談会となったが，それはそれとして，ここで結論的にいえることは，今日話された問題点の中には，図書館側と利用者側相互の意志疎通が，従来円滑に行なわれていなかったということである。今後は，利用者ともっと密接に結びつき，又，部局の違いを乗りこえて，図書室同志も横のつながりを深めなければならないと思う。図書館にある問題は，そのような全体の努力で一つ一つ解決しなければならないということがわかった。

——資 料 紹 介——

○ La Libraire française ; catalogue général des ouvrages en vente... Paris, Cercle de Libraire, 1931. 〔フランス文献一般目録〕

フランスをはじめ，ベルギー，スイス，カナダにおいて出版されたフランス語の図書を含んでいる。これらは2部に分かれており，第1部は，著者あるいは無著者名古典の書名によってアルファベット順になっており，第2部は分類別になっている。1933年に "Les livres de l'année" の書名で補遺が発行された。

京都大学付属図書館には，"La libraire français ; catalogue général des ouvrages parus de 1er janvier 1946 au 1er janvier 1956 : Tables décennales" が3巻と，"Les livres de l'année" の1957年以後のものがある。前者は，1946年から1955年の十年間に出版されたものをまとめてあり，第1部は，著者名と無著者名古典の目録で，著者名，書名，飜訳者，挿画家，叢書，大きさ，頁数，価格（製本，厚表紙，仮綴じ），出版年，出版社と出版地の順に記載されている。第2部は書名目録で，著者名，出版年，出版社が記載されている。後者は，一年分を一冊にまとめてあり，第1部はデューイの十進法による分類になっており，検索を容易にするために，よく用いられる語や著名人のリストがある。第2部は書名目録で，第3部は著者名のアルファベットによる。いずれにも出版社の住所録がある。付属図書館では現在1963年まで所蔵しているが，今後引き続いて購入される。

○ Catalogue général de la librairie française, 1840-1925. Paris, Lorenz, 1867-1945. 32v. 〔1840年から1925年におけるフランス文献の一般目録〕

編者は，V. 1-11 : Otto Lorenz, V. 12-28, pt. 2 : D. Jordell, V. 28, pt. 3-V. 32 : Henri Stein である。

この書誌は，19世紀と20世紀のための標準フランス語による出版目録で，近代国家の書誌の最も重要なものの一つである。それぞれの巻には次のことが記載されている。

(1) 主な著者や書名の目録は，著者のフルネーム，完全書名，版次，出版地，出版年，出版社，頁，大きさ，価格，適宜に簡潔な注記。

(2) 件名目録は，書名，著者，大きさ，出版年，価格。

これらは，単行本，パンフレット，雑誌を除いた論文や年鑑，定期的にベルギーやスイスで出版されたフランス語の出版物も含んでいる。特徴としては，

(1) 記載されている図書の著者について，簡単な伝記を記していること。

(2) その図書がフランス・アカデミーで完成されたかどうかということ。再発行や最新版の場合には，最初の版の出版年を記していること。雑誌からプリントされた図書やパンフレットの場合には，元の雑誌の巻と出版年が記されていること，等が挙げられる。

付属図書館では，1840年から1925年まで，すべて所蔵されているが，件名目録は所蔵していない。

○ Bibliographie de la littérature française de 1800 à 1930. Paris, E. Droz, 1933. 3v. 〔1800年から1925年におけるフランス文献の書誌〕

著者は Hugo P. Thieme で，1907年に "Guide bibliographique de la littérature française de 1800 à 1906" として出版されたものの増補改訂版である。この書誌は，著書と共に伝記的な書誌や批評資料を含んでいるという点で，重要視されている。

V. 1-2 は，著者のアルファベット順に整理されており，各著者の生没年と場所が併記されている。次に(1)出版年，出版社を記した単行本，(2)雑誌論文，(3)単行本形体の評論，(4)雑誌評論を年代記的に記載されている。

V. 3は，「フランスの言語，文学，文明の歴史を引くための著書と件名」と題された目録である。

付属図書館では，第1，2巻だけを所蔵している。

京都大学付属図書館 HRAF 利用内規

第1条　HRAF (Human Relations Area Files) の利用に関しては，この内規の定めるところによる。

第2条　この内規において，「利用」とは学術研究を目的とするスリップの閲覧および複写をいう。

第3条　HRAF のスリップの貸出しは，いっさい行なわない。

第4条　HRAF を利用できる者は，次に掲げる者とする。

1. 京都大学の教官および大学院学生
2. 国立大学の教官または，公私立大学の教員
3. 国公私立の研究機関または，これに準ずる機関の研究者
4. 京都大学付属図書館長が特に認めた者

第5条　HRAF の利用は，当分の間，付属図書館の開館時間中の午前9時から午後4時までとする。

第6条　スリップのフアイルへの返納は，係員がこれを行なう。

第7条　スリップの複写に関しては，京都大学付属図書館文献複写規程の定めるところによる。

第8条　HRAF を研究に利用して発表したときは，その旨を明記するとともに，刊行物を2部納入しなければならない。

附　則

この内規は昭和40年6月23日から施行する。

京都大学図書館改善特別委員会　第7回（6月15日午後3時　於付属図書館会議室）

今回は部局図書室の現状と改善策について討議された。

本学における図書の増加は年々増大しているにもかかわらず，人員がそれに伴わないため業務が停滞してきている。この状態を改善しない限り近い将来図書室の機能はまひすることが予想される。この状態を改善する一つの方法は部局図書室の整備を早急にかつ，強力に行なわねばならないということから，現在部局図書室のもついくつかの問題点が提起され，その結果，この問題を解決する基本的な課題は図書館サービスをどのようにすれば機能的に行ない得るかという点に集約され，今後この問題についてさらに検討することになった。

ダンテ図書展および講演会開催

6月14日より17日まで4日間，本館陳列室において，ダンテ生誕700年を記念して，本館所蔵の旭江文庫中の貴重図書約100冊を展示し一般に公開した。ダンテ全集，神曲，新生，饗宴，俗語論，帝政論，水陸論等の原典は勿論，伊英独仏露訳から日本語に至る各国語訳，1502年の古版本から20世紀の新刊に至る種々の年代版 150cm，の大豪華本から4cmの豆本に至る大小の版型，製本の珍稀なもの等多彩の図書を展示して，毎日多数の参観者があった。

また，14日の午後には，イタリア文化会館長ギオ・ドメニコ博士より「ダンテの書簡について」，京大教授野上素一氏より「ダンテ700年祭より帰りて」と題して講演会が開催された。

堀江館長等文部大臣と懇談

東大はじめ国立七大学付属図書館長は去る5月12日，東大付属図書館において，愛知文部大臣と会談し，長時間にわたって大学図書館の諸問題について懇談した。

── 館内めぐり ──

文献探索へのガイド

参考掛

参考事務

付属図書館の正面階段を昇って右へ曲ると参考室がある。ここには各種事典，辞書，便覧，文献目録，出版目録，索引，年鑑，地図，統計書，法規類など，和洋約3,000冊の参考図書を自由に利用できるよう排架してある。

参考掛は，これらの図書の利用案内，指導は勿論，利用者に知識と情報を提供する図書群が，要求に応じて最も有効に活用できるよう案内する係である。

しかし現在の段階では，雑誌や資料の購入，受贈，交換などの業務におわれ，図書館本来の使命であるレファレンス・サービスを積極的に十分行なうことができないのが，この掛の最も大きな悩みとなっている。

次に実際行なっているサービスについて述べてみよう。

研究者，学生，職員をはじめ，国内各地から寄せられる文書又は口頭による文献，資料の調査をはじめ，日によっては何回となくかかってくる電話による質問に応じるなど，広汎な要求に対して合理的なレファレンス・サービスを行なわなければならない。そのために係員は日々たゆまぬ知識の修得を要求されている。書誌的資料（レファレンス・トゥールズ）を駆使して的確な指示をするためには，緻密さは勿論，時間と労力を惜しまぬ資料探索への熱意が要求される。

館内におけるレファレンス・サービスの外に，自館にない資料を他の館から借りて，閲覧者の便宜をはかる相互貸借も，国会図書館及び旧七帝大の図書館との間に行なわれている。僅かの郵送料で利用できるこの制度は，利用者には喜ばれているが，係員の手数は大きい。

又米，英，中国，ソ連をはじめ諸外国から依頼される文献の調査や，学術資料の交換などに対しては，学内各部局との緊密な連繋により，現在42か国，285機関と定期的な図書交換を行なって，諸外国との文化交流の一役をになっている。

以上の他に参考掛にはもう一つ重要な仕事として，年数回催される展示会がある。この展示会一つを取り上げても，開催の主旨によって，適切な展示資料を選定し，正確な解説を書き上げるために，あらゆる分野における資料に対する知識を必要とするので非常に責任の重い係である。

複写業務

地階にある文献複写室も参考掛として重要な奉仕を行なっている。研究者の依頼により，学術資料を複写するのが主な仕事である。奉仕対象は学内および国内各地，それに外国におよんでいる。最近は資料の複写を外国へ依頼する研究者もふえ事務が繁雑になってきた。需要がますにつれ能率的な処理が必要となる。しかし，中には申込記入が不充分のため係員が資料の調査に思わぬ時間をとられ，又必要な図書が貸出中のため撮影がおくれるなど，余分の労力と時間を費す場合がある。複写ができ上って利用者の手に渡るまでには種々の段階を経るため，いろいろの支障をきたすこともあるが，正確な資料を迅速に渡せるよう努力している。（文献複写室の利用案内については“静脩”創刊号に掲載）

あとがき

▶さきごろ，医学部図書館の竣工式が関係者の祝福のうちに行なわれ，いよいよ今秋，開館の予定で目下諸準備が進められている。この機会に，本号では最近できた三つの図書館に焦点を合せ，新図書館の息吹きとでもいったものを追ってみた。限られた紙面，編集子の力不足から外観を素描するにとどまり，部局図書室のもっているいくつかの問題点を新館ではどのように解決し，対処されようとしているのか，といったことについて十分ふれることができなかった．心残りではあるがまたの機会にゆずりたい．

京都大学附属図書館報「**静修**」Vol. 2, No .2（通巻6号）1965年7月20日発行・発行人 岩猿敏生
発行所．京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電代表77—8111(内線)150—159